

「幸いなる罪」

年間第24主日C年

旧約の時代から、人間の手により頼むのではなく、神のみ手に自分を委ねるように勧められてきました。なぜなら、「主の憐れみは、その尊厳と同じく、偉大なもの」だからです（シラ2・18）。その単純な勧めには、底知れない深みが伺えます。まず、初めに、その偉大な尊厳は、計り知れない「ある」という存在そのものと、限界のない知恵を意味しています。そのゆえに、私たちの存在は可能となり、その存在の目的は神への礼拝と賛美です。信仰のうちにそれを発見するなら、日々の生活を感謝と、全ての人を兄弟姉妹として迎え入れ、神への奉仕の泉に変えるようになるでしょう。しかし、私たちの実生活は必ずしも感謝と奉仕になっているとは言えません。悪を為すということもあります。シラ書の勧めは、まさにそうした体験に向けられています。神の限りのない存在は、知恵だけではなく、憐れみでもあります。全能であるがゆえに私たちの存在を保ち続け、憐れみ深い方であるがゆえに罪びとである私たちをそのまま受け入れ、その罪深さを聖なるものに変えようとするがゆえに私たちの協力を求められるのです。

当然、旧約では新約のように、罪がどんなものであるのかまだ知られていません。罪という泥沼の深さとか、神が私たちをそこから救い出すために、どれほど謙られたかをまだ知りません。イエスは、罪によって砕かれ、ご自分の忍耐と従順によって人間を神と和解させるために、十字架の死に至るまで自分を空しくされました。父なる神が、このように最愛の御子を人間としてお遣わしになるとは、だれも夢にも思いませんでした。その思い、計画、御業は、神だけが為しうるものです。新約聖書は、その御業を私たちによりよく悟らせるために、さまざまなイメージで示してくれます。たとえば、神の国においては最も弱く、見失われた子羊は、迷い出なかった他のすべての子羊よりも尊いのです。また、人の目には、ほとんど価値のない見失ったコインを念入りに捜します。また、父の家から離れ、再び見いだされた罪びとは、死んでいたのによみがえったと考えられ、父の家に住み続けていた息子以上に大きな喜びをもって祝われるのです。それらのイメージを通して私たちは、神の憐れみが、ご自分の尊厳、ご自分の知恵のように、限界のないものであることを教えられます。

福音書の言葉を少し思いめぐらしました。主が光としてこの世に遣わされたのは、この世を裁くためではなく、この世を照らすためです。その光を心に受け入れるなら、私たちは、主が照らしてくださることによって罪びととしての自分を知ることになります。自分を罪びととして認めることのうちに、主の憐れみのさまざまな側面を見ることができます。先ず初めに、痛み of 思いという煉獄の側面があります。その煉獄の体験を通して、私たちは、自分の中の暗闇は考えていた以上に濃く、大したことはないと思った自分の不忠実は、思っていたよりも、自分にも、人にも害を与えていたことに気づかされます。これはシエナの聖カタリナが体験したことです。彼女は、自分には小さいと思われた不忠実が、シエナの町に、どれほどの崩壊をもたらすかを知り、驚かされました。一方、その煉獄の体験には、主の御血によって罪がゆるされ、新しい創造が伴います。つまり、み言葉からの光は、罪に伴う痛悔の苦しい思いを生じさせても、新しい命をもたらすのです。

他方では、私たちのうちに、み言葉の光が入ることを妨げる邪魔物があります。それは、私たちの中に起こり、すべてを破滅に導く感情です。ある心理学者はそれを単なる「裁き手」と呼び、他の心理学者は「超自我」と呼びます。いずれにせよ、私たちのうちに自己嫌悪や自己軽蔑を引き起こす感情です。その自己軽蔑はたやすく罪悪感になり、それによって、一種のマヒ状態に陥り、主の憐れみに対して、ゆるされるはずがないという絶望感に変えられるのです。そうした罪悪感とは、「何か悪を犯した」ことを知らせてくれる、良心の健全な働きとは全く異なります。罪悪感とは、精神の病と言えます。良心とは、神から遣わされる天使のようなもので、私たちのうちに癒されるべきところがあるのを知らせてくれます。み言葉の光は二重に影響を及ぼします。光によって罪悪感は弱まり、完全に消えることさえ考えられます。また、その光は、悪を犯したという良心の健全な働きを真の痛悔に変えてくれます。心に痛みを感じながら、犯した悪が自分にも、兄弟にも害を与えた上に、神に向けられていると悟る時、み言葉の光が私たちの心を照らしたと言えます。そうした痛い思いという体験は、ゆるしを願うということに通じるのです。神は、新しい心を造られることによって、その願いに応えてくださるのです。罪悪感とは、自分を中心にし、真の痛悔は主の十字架の力を知り、私たち自身を憐れみのみ手に置いてくれます。

主のみ言葉の力について、ご一緒に思いめぐらしてみました。心の痛みという煉獄の体験を通して、神の新しい創造を体験しますが、こうした光の体験には、尊い共同体的な側面があることについて、最後に考えてみましょう。つまり、罪が自分のうちに引き起こす破滅的な働きを悟るならば、一人ひとりの兄弟姉妹がメンバーである、主の神秘体にもたらす害についても、その重大さを知るようになります。それには、主からの新しい招きが伴います。罪びとである兄弟の罪のために神のゆるしを願い、その償いをささげるようにという招きです。幼きイエスの聖テレジアは、その招きに素晴らしく応え、自分のすべてを供え物としてささげました。今日の典礼のモーセに関するエピソードも、同じ教えです。そこでモーセは、神のみ前に、罪びとである自分の民の弁護者として、民へのゆるしをいただかないかぎり自分の救いを受けようとしません。そこでモーセとテレジアは、「父よ、彼らをゆるしてください。彼らは何も知らないのですから」という心で一心に祈っています。これは、当然、モーセとテレジアだけでなく、私たち一人ひとりの課題でもあります。光によって起こされる痛悔は、私たちの罪を消し、新しい創造をもたらすだけでなく、私たちが全世界の救いのための、神の協力者にしてください。

これほど優れた救い主が与えられることで、聖アウグスチヌスは、アダムの罪を幸いなる罪と呼びました。罪のゆえに主の憐れみの豊かさをいただいた私たちも、そのゆえに自分の罪を幸いなる罪と呼ぶことができるでしょう。

J. E. Perez Valera S. J.